

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 坂本 真士

研究課題		新しいタイプの抑うつ症候群に関する臨床社会心理学的研究（6）
報告の概要	研究目的 および 研究概要	従来の抑うつとは異なる新しいタイプの抑うつ症候群（新タイプ抑うつ）が産業領域を中心に問題になっている。申請者のグループでは、新しいタイプの抑うつ症候群の発症に関する心理学モデルを提唱し（坂本・山川, 2020）、検証を行ってきた。本研究では、その検証を進めるべく作成した対人過敏・自己優先尺度（IPS2）を用いて、心理学モデルの検証を引き続き行った。具体的には、学生を対象とした質問紙調査によって IS/PS 傾向が高い人が対人葛藤場面で選択しやすい行動を調査し、授業を通じて新タイプ抑うつへの偏見の低減を図る実践的研究を行った。
	研究 の 結果	対人葛藤方略の研究においては 203 名の大学生から有効回答を得た。データ分析の結果、対人過敏傾向および自己優先志向と関連する不適応的な行動様式があることが明らかになった。また、対人葛藤方略の選択には、その方略の選択が対人葛藤において有効であるという評価が、対人過敏傾向・自己優先志向とは独立に影響していることが明らかになった。 一方の実践的研究では、申請者が担当する授業（「臨床社会心理学特講」）にて、昨年度に引き続き実施した（実施の様態は昨年度と同様であった）。2ヶ年分合わせて分析に足りる標本数が集まった。
	研究 の 考察 ・ 反省	対人葛藤方略の先行研究から対人葛藤の解決にはつながらないとされている方略に対して、ある人たちは解決に有効であると誤って評価し、それが不適応行動につながっている可能性が示唆された。 実践的研究については、複数回にわたって縦断的にデータを取っており、欠損値の処理に時間がかかっているが、早期に研究発表できるよう努めたい。授業自体は受講生からの反応もよく大きな問題は生じなかった。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 研究発表 高椋大樹・鈴木雄大・坂本真士 (2024). 新タイプ抑うつの人への援助行動を促進するプログラムの開発 日本認知・行動療法学会第 50 回大会, パシフィコ横浜会議センター, 2024 年 9 月 24 日 研究成果物 竹澤美桜・高梨利恵子・坂本真士 (印刷中). 対人過敏傾向・自己優先志向と対人葛藤方略選択の関連 日本大学心理学研究	